

[道 徳]

子どもの心に残る道徳授業の工夫

－第6学年「ラッシュアワーの惨劇」の実践から－

梅澤ちひろ*

1 主題設定の理由

平成30年度、小学校で「特別の教科 道徳」が始まった。検定教科書を使って週35時間の授業を行うことが義務づけられ、評価が導入された。小学校学習指導要領解説 道徳編¹⁾には、「資料は、ねらいとの関連において児童の心に響くものを多様に選択する。」とある。また、「教材は、ねらいを達成するために中心的な役割を担うもの」であるから、「どのようにすれば児童の学習意欲を高め、道徳的価値の自覚を深めることができるかなどについて多面的に検討」する必要がある。「資料を学習指導で効果的に生かすには、登場人物への共感を中心とした展開にするだけでなく、資料に対する感動を大事にする展開にしたり、迷いや葛藤を大切にしたりした展開、知見や気づきを得ることを重視した展開、批判的な見方を含めた展開にしたりするなど、資料の特徴を生かした指導の手順や学習過程の工夫が求められる」とされている。すなわち、道徳授業において資料は非常に重要なものであり、資料のよさを生かした授業展開の工夫が求められることが分かる。

この年度末、実践の成果と課題を授業改善に生かす目的で、最後の授業後に子どもたちを対象としたアンケートを実施した。学習指導において資料のよさを生かすことができたかどうか、子どもの立場から評価してほしいと考えたからである。

子どもたちが関心のある題材を扱った資料は心に響き、感動、葛藤、気づきなどを与える。資料のよさを十分に生かすことができれば授業は心に残るものになることから、子どもの心に残る授業を目指して授業を行わなければならない。子どもたちには「心に残っているお話（資料）」と「心に残っている授業」をそれぞれ3つずつ選択させた（表1）。「心に残っている」という表現を用いたのは、子どもにとって「心に響く」という表現が理解しにくいと判断したからである。なお、授業で使用した教科書は「みんなの道徳 6年」（学研教育みらい）である。

表1 6年1組 心に残っているお話（資料）と心に残っている授業（25人）

教材名・内容項目	心に残っているお話（人）	心に残っている授業（人）
「ロレンゾの友達」・友情、信頼	6	13
「ラッシュアワーの惨劇」・生命の尊さ	6	9
「青の洞門」・よりよく生きる喜び	2	5
「のりづけされた詩」・正直、誠実	5	1
「命を見つめて」・生命の尊さ	8	4

人数は、その資料を選んだ子どもの延べ人数である。「心に残っている」という聞き方では、資料や授業の良し悪し以外の理由で選択した可能性も否めないが、道徳授業に対する感想には、「命の大切さを学んだ。」と書いた子どもが50%、その他、「思いやり」「親切」「人に優しく」などといった、他者に対する心遣いやかわり方に関することに触れていた子どもが大勢いたことから、「心に残っている」理由はマイナスでネガティブなイメージではないと思われる。ちなみに、本学級には小学校低学年までに父親を病気で亡くした女子児童が2人在籍していることから、平成29年度は内容項目が「生命の尊さ」の学習をするときは配慮を要した。そして、1年間の2人の様子から、平成30年度は直接的な表現を避ければ問題ないと判断した。子どもたちが選んだ資料を見て、授業者の思い入れの強さが伝わると感じた。「ロレンゾの友達」は、上越教育大学上廣道徳教育アカデミー小宮 健 特任教授による公開授業であった。有名資料

*上越市立稲田小学校

である上に参観者が大勢いたこと、初対面の授業者に緊張していたこと、授業展開のおもしろさなどの理由から、心に残ったと推測される。「青の洞門」は、アンケート実施日に最も近い、年度の最後の授業で扱ったため、記憶に残っていたとも考えることができる。

同じアンケートを6年2組で行った結果が表2である。

表2 6年2組 心に残っているお話（資料）と心に残っている授業（26人）

教材名・内容項目	心に残っているお話（人）	心に残っている授業（人）
「ミッキーマウスの誕生」・希望と勇気, 努力と強い意志	10	3
「マザー・テレサ」・勤労, 公共の精神	10	10
「ロレンゾの友達」・友情, 信頼	9	7
「食べ残されたえびになみだ」・節度, 節制	7	5
「ブランコ乗りとピエロ」・相互理解, 寛容	7	5
「移動教室の夜」・善悪の判断, 自律, 自由と責任	7	3
「心にくく風」・礼儀	3	5

2組のアンケートには「話し合いながら」「相手の意見を聞いて」「意見を交流させながら」や、「人間関係」「友達関係」「相手の気持ちを考える」という言葉が目立った。2組では、対話的な学びから他者との関わり方を重視して授業を行った担任の姿勢が感じられる。

2つの学級で行ったアンケート結果から、心に残っているお話と心に残っている授業は一致しないことが分かる。授業前や授業中に資料から受ける印象がインパクトの強いものだとしても、授業でのエピソード（学習活動や友達の発言、教師の講話など）がそれに勝っていれば、心に残っている授業となりえる。逆に、資料を読んで心が動いても（「かわいそう」、「感動した」、「ひどい話だ」など）、興味ももてず退屈な授業展開だったとしたら、子どもの心には残らないであろう。

本稿では、担任が指導した授業の中で「心に残っている」と評価した子どもの数が他と比較して多かったことと、重点を置いて指導した内容項目であったことから、「ラッシュアワーの惨劇」の実践を取り上げ、どのような手立てが有効だったかを検証する。

2 実践の概要

授業は、平成30年1月に糸魚川市立糸魚川東小学校の6年1組の児童25名を対象に行った。

(1) 主題名 自他の命を大切に

D：主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関する「生命の尊さ」

(2) 資料名 「ラッシュアワーの惨劇」（「みんなの道徳 6年」学研教育みらい）

(3) ねらい 自分の生命を犠牲にしてまで他人を助けようとした2人の男性の行動に対する意見交流を通して、かけがえのない自他の生命を尊重しようとする心情を育てる。

(4) ねらいとする道徳的価値について

本主題は、第5学年及び第6学年の内容項目（19）「生命が多くの生命のつながりの中にあるかけがえのないものであることを理解し、生命を尊重すること。」をねらいとしている。これまで、児童は、同じ内容項目を扱う「その思いを受け継いで」と「命を見つめて」という2つの教材を通して、生命のかけがえのなさや、祖先から祖父母、父母、そして自分、さらに自分から子ども、孫へと受け継がれていく生命のつながり、限りある生命を懸命に生きることの尊さを学んできた。本時では、社会的な関わりの中での自他の生命の尊さに気付かせたい。

(5) 児童の実態について

本学級のみならず、この時期の児童は、生や死にかかわる生命の大切さを直接的に体験する機会が少ない上に、社会的には生命を軽視するような事件や報道が増え、生命についての考え方が浅くなってきているといえる。

本時では、自らを犠牲にしてまで見ず知らずの他人を救おうとした2人の男性の思いを考え、自分だけでなく、他者の生命も大切にしようという心情につなげたい。

(6) 教材について

本教材は、ラッシュアワーのホームで、線路に落ちた男性を助けようと、日本人のカメラマンと韓国人留学生が線路に飛び降りた実話を取り上げている。男性を助けようとして命を失った2人の行動は勇気あるものだが、3人とも助かる可能性は極めて低い状況でとるべき行為だったのか。自分を犠牲にしてまで他人の命を助けようとしたことは、「命を大切にしている」と言えるのか。社会に与えた影響や残された家族の悲しみ、事故後の駅での対応に触れながら、友達との意見交流を通して、深く考えさせたい。

(7) 授業の構想

① 導入

毎時間書いているノートを見ながら、これまでの「生命の尊さ」を扱った学習を振り返り、道徳的価値への動機付けを図る。

② 展開

ア ウェビングマップ(図1)を作る。

- ・線路に飛び降りた2人は「命を大切にしている」といえるのか、「命を大切にしていない」のかを、両方の視点で考える。ここでは、「命を大切にしない」という表現を使ったが、自分を犠牲にしてまで他者を救おうとした2人の行為を価値づけたものではない。二つの視点から考えることによって、道徳的価値について一面的に捉えず、多面的・多角的に考えさせるために用いたものである。

イ グループで話し合う。

- ・各々の考えをもち寄り、グループで1枚のウェビングマップを作る。限られた時間内に全ての子どもたちが抵抗なく自分の思いを表出することができるように、学級全体ではなくグループで話し合う。

ウ 本教材に関連する事実を追加する²⁾。

- ・2001年1月28日付朝日新聞「天声人語」(資料1)には、「相手も救えず、これでは無駄死にだよ。」という、線路に飛び降りて亡くなった関根史郎さんの母親のコメントが掲載された。この事故を題材として日韓合作映画が制作された。資料を読んだだけでは、関根さんの行動は他者の命を大切にしていると評価する児童が多いと予想されるが、母親の心情を知って戸惑う子どもがいると考えられる。二つの事実を提示することで、児童の思考を揺さぶり、さらに「命」について深く考えさせたい。

③ 終末

- ・B6版のノートを道徳ノートとして使用している。授業で学んだことを書くことで、考えを深め、整理し、未来に希望をもたせたい。また、授業を通して考えがどのように変化したか、自分を見つめる時間としたい。
- ・線路に飛び降りた2人は立派ではあるが、彼らを英雄視し、正義感から「ほくも線路に飛び降りて助けたい」という気持ちをもつ子どもがいないとは限らない。そのこと自体を悪いと言い切ることはできないが、命を落とした行為の真似は、他者の生命を大切にすることには結びつかない。授業の最後に、「自分の命を顧みずに他者を助けようとした行為は尊いが、担任としては、助かる見込みのない行動はしてほしくない。自分の命を大切にしてほしい。」という思いを伝えるために、説話を行う。



図1 ウェビングマップ

<心の優しいものが先に死ぬのはなぜか>と詩人、中桐雅夫は歌った。ニュースの詳細を知って、この一節が鮮烈に浮かんでくる。東京のJR新大久保駅で、ホームから転落した人を助けようとした2人の男性が、電車にはねられて亡くなった。

「彼ならやるかな」。その1人、カメラマン、関根史郎さん(47)の知人が語っていた。「生きるのが下手だった。何でも一生懸命だった」とも言った。もう1人、韓国からの留学生、李秀賢(イスヒョン)さん(26)の友人は「弱い人を見ると放っておけない、彼らしい行動だった」と、しのんだ。

とっさの場合どう振る舞うかに、人の本質がしばしば表れる。2人はちゅうちょなく、見ず知らずの男性を救うために動いた。なかなかできることではない。が、ここに、それをした人たちがいた。心ふさぐことがらが充滿しているなか、ポツと明かりがともった。

人間は素晴らしい一面を持っている。よくないことをする人もいるが、善い人も少なくない。いや、善い人の方が多いに違いない。そんな気持ちになってくる。けれども、無念さわまりないことに命が消えてしまった。限りなく高い代償である。

きのう、現場のホームに立ってみた。折からの雪で、ホームの端はひときわ滑りやすい。線路に落ちかねない。ホームの幅も広くはない。右、左と、つぎつぎ電車が入ってきて、出て行く。あらためて怖かった。

この駅だけが特殊なのではない。全国の駅の、これが日常の風景である。利用者はつねに危険と隣り合わせている。実際、転落事故は後を絶たない。ホームの下に待避できる余地を設けるのも大切。さらに、ホームに転落を防ぐさくを作るといった方法も真剣に考えるべきだ。

「相手も救えず、これでは無駄死にだよ」。のこされた関根さんの母、千鶴子さん(76)のことばが頭を離れない。

資料1 朝日新聞 2001年1月28日 天声人語

(8) 授業の実際

段階	○学習活動 ・ 予想される児童の反応	○教師の指導・支援 ◎評価
導入 3分	<p>○ノートを見ながら、これまでにに行った「生命の尊さ」を扱った授業を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「その思いを受けついで」の授業のときに、「命は1つしかないから、大事にしたい。」と感想を書きました。 ・「関わっている人が悲しむから、命を大事にしたい。」って思いました。 ・「命を見つめて」の授業のときは、「辛いことがあってもくじけずがんばりたい。」という感想を書きました。 ・生きていることは幸せだと思いました。 <p>○本時の課題を提示する。</p> <p>命について考えよう。</p>	<p>○「生命の尊さ」を扱った授業での、児童の主な感想を掲示する。</p> <p>○ノートの記述から、生命の尊さについて学習した時間を想起させて、価値への導入を図る。</p> <p>○児童は、資料を事前に読んで、感想を書いておく。</p>
展開 32分	<p>○個人でウェビングマップを作る。</p> <p>線路に飛び降りた2人は、命を大切にしているといえますか。命を大切にしていらないといえますか。</p> <p>○グループでウェビングマップを作る。</p> <p>「命を大切にしている」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・線路に落ちた男性も、自分自身も、助かると思って線路に飛び降りたのだから、自分の命だけでなく、男性の命も大切にしたいといえる。 	<p>○グループでの話合いの前に、個人で考える時間を設ける。</p> <p>○多様な意見に触れることができ、なおかつ全員が自分の考えを発表することができるように、授業者が意図的につくった5～6人のグループで話し合う。</p> <p>○児童は、グループで1枚のウェビングシートに自分の考えを簡単に書きながら、口頭で補足していく。</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ・結果的に死んでしまったけれど、命を大切にしていないわけではない。 ・線路に飛び降りた瞬間は死ぬとっていなかったはずだから。 ・自分自身はともかく、人の命は大切にしていると思う。 ・2人の行動が命を大切にしていたと思われたからこそ、映画化されたり、日本と韓国でニュースになったりした。 <p>「命を大切にしていない」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分も線路に落ちた人も死んでしまったから。 ・家族や周囲の人が悲しんでいるから。 ・関根さんのお母さんが「無駄死に」と言っているから。 <p>○「命」について話し合ったことを、グループでまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の命だけでなく、人の命も大切にしたい。 ・他人の命を守るために、自分を犠牲にすることがある。 	<p>○グループでの話し合いを活発にし、多様な考えが出るように、この事故が題材となった映画のポスターと、天声人語で取り上げられた関根史郎さんの母のコメント（「相手も救えず、これでは無駄死にだよ。」）を紹介する。</p> <p>○グループの仲間の考えを1つに絞るのではなく、本時の学習を通して新たに気付いたことや、深まった考えを書くように促す。</p>
<p>終末 10分</p>	<p>○本時の学習を通して、「命」について感じたことや考えたことをノートに書く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の命だけでなく、他の人の命も同じように大事にしていきたい。 ・今までは、自分の命を守ることにしか考えたことがなかったけれど、これからは、自分以外の人の命も守ることができる人になりたいと思いました。 <p>○授業者の説話を聞く。</p>	<p>◎教材や友達との意見交流を通し、自分の生き方を見つめ直すことで、自他の命の尊さに気付き、自分なりに考えることができたか。（ノート）</p> <p>○「自分の命を顧みずに他人を助けようとした行為は尊いが、担任の立場では、関根さんのお母さんと同じ考えで、助かる見込みのない行動はしてほしくない。まずは、自分の命を大切にしてほしい。」と、担任の本音を伝える。</p>

3 本時の成果と課題

本時では、教科書に掲載されている資料や写真に加え新聞や映画のポスターを提示したことで、より感情移入することができた。物語などの読み物資料を扱う場合、読解力の優劣が内容理解や価値理解の差になることがあるが、今回は、すべての子どもたちが事実関係を把握して学習活動に臨むことができた。

友達との意見交流や映画ポスターと新聞記事の提示により、内面的な葛藤を感じた子どもがいた。ウェビングマップ作りでは、線路に飛び降りた2人の行為を「命を大切にしていない」という視点から捉えさせることにより、「自分を犠牲にしてまで他者の命を大切にしたい」という気付きを引き出すことができた。

本時は、「なぜだろう」「こんな時、どうしたらいいのだろう」「自分ならどうするだろう」と考えさせることができた教材だったため、思考を深めることができた。

グループ学習では一人一人が自分のウェビングマップに書いたことに説明を加えながら書き写していった。しかし、個人の活動を繰り返すことになってしまい、活動時間に無駄を生じた。このような場合、個人がウェビングマップを作る時には付箋に書き込み、グループはその付箋を貼りながら各自が根拠を話すようにすると時間短縮になる。また、個人の活動とグループでの活動の内容やねらいを別のものにするによって、45分間の授業をより有意義に使うことができるようになる。本時では、グループでウェビングマップを作った後で、「命」について考え、学級全体が共有する

時間となれば、より学びが深まったかもしれない。

4 考察

本授業が子どもの心に残ったのは、資料のよさに加えてねらいを達成させるために講じた手立てが有効だったからであると考え。教材研究をする際には資料を熟読し、子どもたちの実態を考慮して改作・省略、あるいは差し替え、補助資料などを検討していく必要がある。実際の出来事に基づいた教材を扱う場合、情報収集や取捨選択も行っていきたい。

本時は、ウェビングマップを使ったが、子どもたちの思考を整理したり視覚化したりするための思考ツールなどを適切に用いて考えを深めていきたい。

また、対話的な学びを実現するために、ペア・グループ・学級での活動は個人で考えたことを伝え合う場にするのではなく、多面的、多角的な考えを共有する場としたい。

授業を通して授業者の思いは子どもたちに伝わるのが実感できた。道徳授業において、価値の押しつけではなく、きめ細やかな学級経営を背景に、子どもと担任、子ども同士の信頼関係や絆をより強めていく必要があると感じた。

5 参考文献

- 1) 文部科学省「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編」p 69, 83
- 2) 日本教育新聞社「道徳科Q&Aハンドブック」2018年 p 29